※この記事は読売新聞社の許諾を得て転載しています。（読売新聞朝刊平成 29 年 4 月 12 日掲載）

大腸がん転移抑制 たんぱく質発見

＊愛知県がんセンター

愛知県がんセンター研究所（名古屋市）の研究チームは、細胞内の特定のたんぱく質が大腸がん細胞の転移を抑える働きがあることを、初めて発見したと発表した。がん治療につながることが期待される。研究成果は英専門誌に掲載予定。

青木正博・分子病態学部長と同部の佐久間圭一朗室長らは、マウスを使った実験で、細胞内にある約2万種類のたんぱく質のうち、大腸がん細胞の転移のブレーキとなるたんぱく質を突き止めたという。このたんぱく質を減らすと、がん細胞の悪性化に関与する特殊なたんぱく質がつくられることを確認。さらに、がん細胞が大腸の上皮に発生後、周りの組織に浸潤・転移する現象が起きると、ブレーキ役のたんぱく質は減少していることも解明した。

青木部長は「今後、ブレーキのメカニズムを詳しく解明し、転移の抑制・予防を目的とした薬剤の開発につなげたい」と語った。金沢大がん進展制御研究所の大島正伸教授（腫瘍遺伝学）は「ブレーキ役のたんぱく質の存在や、大腸がん細胞が浸潤・転移する性質を獲得した過程で悪性化するメカニズムは、よく分かっていない分野だけに、治療法確立につながる可能性がある」と評価している。